

乙 御 前 母 御 書

文永一〇年十一月三日 五二歳

なによりも女房のみとして、これまで来たりて候ひし事。これまでながされ候ひける事は、さる事にて、御心ざしのあらわるべきにやありけん^顯と、ありがたくのみをばへ候。釈迦如来の御弟子あまたを^在はしゝなかに、十大弟子とて十人ましましゝが、なかに目犍尊者と申せし人は神通第一にてを^はしき。四天下と申して日月のめぐり給ふところを、かみすぢ一すぢきらざるにめぐり給ひき。これはいかなるゆへぞとたづぬれば、せんじやうに千里ありしところを^通かよいて仏法を聴聞せしゆへなり。又天台大師の御弟子に章安と申せし人は、万里をわけて法華經をきかせ給ひき。伝教大師は三千里をすぎて止観をならい、玄奘三蔵は二十万里をゆきて般若經を得給へり。道の^道とをきに心ざしのあらわるゝにや。かれは皆男子なり、権化の人のしわざなり。今御身は女人なり。ごんじち^{權 実 知}はしりがたし。いかなる宿善にてやを^はすらん。昔、女人は^{好 夫 徳}すいをとをし^のびてこそ、或は千里をもたづね、石となり木となり、鳥となり蛇となれる事もあり。

十一月三日

日 蓮 花 押

を と ご ぜ ん の は ゝ

を と ご ぜ ん が い か に ひ と 〆 と な り て 候 ら ん。法華經にみ^宮や^仕づか^奉わ^公せ給ふほうこうをば、を と ご ぜ ん の 御 い の ち さ い わ い に な り 候 は ん。

いまは法華經をしのばせ給ひて仏にならせ給ふべき女人なり。かへすがへす、ふみもの^{文 物 臭}ぐさき者なれども、たびたび申す。又御房たちをも^{不 便}ふびんにあたらせ給ふとうけ給はる。申すばかりなし。